

滑稽な馬上槍試合

—『トットナムの馬上槍試合』を読む

柴田良孝

The Tournament of Tottenham (『トットナムの馬上槍試合』、以下 *TT* と略称する。)は、イギリスの中世末期 15 世紀の前半頃の作と推定されている作者不詳の頭韻詩である。行数は 234 行と短い。内容は、近郷近在の農民が集まり、騎士を真似て馬上槍試合を催し、賞品の家扶の娘を獲得しようとする果敢な村の若者たちの姿を描く話 [peasant-tournament (農民達による馬上槍試合)、即ち mock-tournament (模擬の馬上槍試合)] である。

TT について、これを初出版した William Bedwell (1561-1632) は、「本当の出来事を真面目に語ったもの」と解し次のように述べている。娯楽、もしくは軍事訓練でもある馬上槍試合は、ステーブン王治世下 1135 年頃から盛んになったが、多量の流血が見られることなどから、教会によって禁令が出され、次いでエドワード III (1327-1377) によって禁止された。そのような状況下で、*TT* に描かれた戦いは、「子供の戯れ言ではなく (“no childer-game”）」、本当の出来事なのである。

しかし、Bishop Thomas Percy (1729-1811) は、*Reliques of Ancient English Poetry* に *TT* を収録するに当たって、Bedwell とは異なる説を提示している。教会や国家による禁止にも拘わらず、馬上槍試合などが一向に無くならない。そこで、詩人は *TT* を描くことによって馬上槍試合を嘲笑 (ridicule) し、それをなくそうとしたのだ、と。以後大方は、*TT* を馬上槍試合、もしくは騎士道を滑稽化し、茶化している (burlesque) 作品と解す解釈

が大方を占めるようになった。

しかし、この解釈の流れに一部のとりながらもより多角的な検討によって *TT* の解釈に一石を投じる論文が発表された。George F. Jones の論文である（1951年）。彼の論文の要旨は次のようである。英文学では peasant-tournament を述べる作品としては、*TT* だけある。しかし、15,6世紀のドイツ文学には、例えばハインリヒ・ヴィッテンヴァイラー（Hienrich Wittenwiller）の『指輪』（*Ring*）（1420年頃の作品）の中のラッペンハウゼン（Lappenhäusen）の peasant-tournament などがあり、そのような作品と比較すると共通するものが多々ある。その比較によって、明らかになることは、（1）農民になりすましているのは、町の人々の可能性がある。そして、（2）騎士達を描く詩作品を嘲弄し（parody）、（3）騎士達の馬上槍試合を茶化し（burlesque）、さらに（4）槍試合に反対する教会の態度も反映させている。加えて重要なことは、（5）上流階級の人々を楽しませ、農民が真似してはいけないことを教えるために、農民を、あるいは農民に与えられた固定観念（臆病、醜い、愚か、貪欲、厚顔無恥）をあざ笑っている。このように Jones は解釈したのである。

この Jones の解釈は、*TT* の諸解釈研究をすべて網羅している感も否めないではない。ちなみに、O. Cargill（1926）、F.A. Foster（1928）、M. Carey（1930）、L.J. and N.H. Owen（1971）らは、大方当時人気のあったロマンスに対する反感から、トーナメント（馬上槍試合）の形式を滑稽化し、風刺している。前述の Percy, Thomas Warton（1824）、W.C. Hazlitt（1866）、W.H. French と C.B. Hale ら（1930）は、騎士道のバーレスク。さらに、D.B. Sands（1966）、F.H. Cripps-Day（1918）は、領主や領主の楽しみをまねている農民をからかっている、としている。以上がこれまでの解釈の概要である。

さて、それでは一体、*TT* をどう解釈するのか。これが本講座における私のテーマであるが、先ずこの詩の生み出す滑稽さがどんな詩構造から生み出されているかに注目しておきたい。*TT* は、頭韻長行による、1スタンザが9行、26のスタンザから成る全行で243行の作品であるが、頭韻長行による詩作は、いわゆるロマンスを語るのに使われ、14世紀中頃から西中部地方で流行し始め、14世紀末ころからは、北部地方、スコットランド地方にも及んだと言われている。すなわち、*TT* も、アーサー王などの宮廷の勇敢な騎士が活躍するロマンスを想起させる詩形を取っているのである。

ところが、第1スタンザを例に取れば、それが逆転している。即ち、馬上槍試合で活躍すると期待される騎士として出てくる名が、騎士道の名声嚇々たる名ではなく、指小辞 *-kin* で縮小されたその辺に転がっているような *rustic* (田舎風) な、あるいは身分の低さから想定させる卑俗さ、低俗さを思わせる名なのである。即ち、*Hawkin* や *Tomkin*、また *Perkin* などの田舎者が登場してくるのである。そして、詩人は、「剛胆で、武勇めざましい者たちのあのような勇敢な振る舞いを述べずにいるとすれば、それはけしからんことだ。」(11.4~9) と語るが、これが逆説的な意味合いを持つであろうことは、もはや聴衆(読者)にとって、織り込み済みのこととなっているのである。即ち、ロマンスを語るに相応しい頭韻長行と詩語が用いられて、勇壮なトーナメントが語られるはずなのだが、その内容は、近郷近在の農民が集まり、騎士を真似て馬上槍試合を催し、賞品の家扶の娘を獲得しようと争う村の若者たちのドジな姿が描かれているのである。即ち、主題と内容との間に生じる不調和、ズレ、転覆によって生み出される滑稽さ、あるいは可笑し味が語られているのである。

このような滑稽さは、一体何に、誰に、どのような意図のもとで、醸し

出されているのか。この講座では、これらの疑問に対し、原文に沿って読解し、一定の見解を提示することを目論んだが、以下の点で Jones の説を確認することができた。即ち、*TT* は、騎士達を描く詩作品を嘲弄し (parody)、騎士達の馬上槍試合を茶化し (burlesque)、さらに槍試合に反対する教会の態度も反映させている。そして、農民を対象として取り上げているが、それは、農民に与えられた固定観念 (臆病、醜い、愚か、貪欲、厚顔無恥) を嘲笑っている。

参 考 文 献

- Bedwell, W. *The Tournament of Tottenham*. London : John Norton, 1631.
- Carey, M. "The Wakefield Group in the Towneley Cycle." *Hesperia* 11 (1930) : 210-244.
- Cargill, O. "The Authorship of the *Secunda Pastorum*." *PMLA* 61 (1926) : 810-831.
- Crips-Day, F.H. *The History of the Tournament in England and in France*. London : B. Quaritch, 1918, 18-19.
- Foster, F.J. "Was Gilbert Pilkington Author of the *Secunda Pastorum*." *PMLA* 43 (1928) : 124-136.
- French, W.H. & Hale, C.B. *Middle English Metrical Romances*. New York : Prentice-Hall, 1930.
- Hazlitt, W.C. *Remains of the Early Popular Poetry of England*. London : J.R. Smith, 1866, 82-87.
- Jones, G.F. "The Tournament of Tottenham and Lappenhausen." *PMLA* 46 (1951) : 124-136.
- Owen, L.J & N.H. *Middle English Poetry : An Anthology*. Indianapolis : The Bobbs Merrill Co., 1971, 326-335, 426-432.
- Percy, (Bishop) T. *Reliques of Ancient English Poetry*. London : J. Dodsley, 1765, Volume the Second, 13-24.
- Sands, D.B, ed. *Middle English Verse Romances*. New York : Holt, Rinehart and Winston, Inc, 1966.
- Warton, T. *History of English Poetry*. (A Facsimile of the 1774 Edition), New York : Johnson Reprint Co., 1968, 102-104.
- なお、*TT* のテキスト並びに写本については以下を参照されたい。
拙著『*The Tournament of Tottenham* と *The Feast* の出版史』、『東北学院大学論集 (人間・言語・情報)』第 104 号、平成 5 年 3 月。
また、*TT* の解釈等については以下も参照されたい。

滑稽な馬上槍試合—『トットナムの馬上槍試合』を読む

- 拙著「*The Tournament of Tottenham* の解釈研究について」、『東北学院大学論集（人間・言語・情報）』第 106 号，平成 5 年 12 月。
- 『*The Tournament of Tottenham* の作者研究について」、『東北学院大学論集（人間・言語・情報）』第 105 号，平成 5 年 9 月。
- さらに，上記において言及されていない論文としては以下のものがある。
- Cooke, W.G. “*The Tournament of Tottenham* : An Alliterative Poem and an Exeter Performance.” *Records of Early English Drama Newsletter* 11 (1986) : 1-3.
- Cooke, W.G. “*The Tournament of Tottenham* : Provenance, Text, and Lexicography.” *A Journal of English Language and Literature* 69 (1988) : 113-116.
- Harris, A.L. “Tournaments and *The Tournament of Tottenham*.” *Fifteenth-Century Studies* 23 (1996) : 81-92.
- Zaerr, L.M & Baldassare, J.A. “*The Tournament of Tottenham* : Music as Enhancement of the Prosody.” *Fifteenth-Century Studies* 16 (1990) : 239-252.
- Wright, G. “Parody, Satire, and Genre in *The Tournament of Tottenham (1400-1440)*.” *Fifteenth-Century Studies* 23 (1996) : 152-170.